
殺

てんとう虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
殺

【Nコード】
N1779B

【作者名】
てんとう虫

【あらすじ】
きっかけは、親の離婚。心の冷めた少年の卑劣な犯罪。

第一話・僕

一週間前まで僕は、母の実家で暮らしていた

別居して一年やっと親は、離婚し

離婚届を出した翌日母は、男と失踪。

どうやら僕は、祖父母の家に捨てられたらしい

このまま、祖父母の家で暮らすのだろうかと考えたが、

「おじいちゃんたちは、もう七十過ぎで中学生を育てられるほど裕福でもない」

座っている僕の肩に弱弱しい祖父の手が触れた

「それに、今年は、受験だろう高校に行かせてやる金もないんだ」

「遠まわしに出てけってこと？」

祖父母には、年金がたくさんある

だから別居中の一年間、無職の僕と母を養えて来た。

母が居ない今、僕は、邪魔なだけらしい

「・・・お父さんの所に行きなさい」

どうやら父とは、もう連絡がついているようだ

あの、気狂い男をどうやって丸め込んだのだろうか

翌朝、朝食も与えてくれず、追い出されるように母の実家をでた。

父の住むH県まで片道五時間、新幹線に乗る。

祖父母からわたされた物は、交通費だけ

小遣いというものをもらっていなかったから無一門同然で、

昼は、隣に座る人が口にする物を見て飢えをしのいだ。

祖母が言うには、父は、入籍は、してないものの

半年前から子持ちの女性と同居しているらしい

その女性が僕のことを気に入ってあずかることにしてみたいだ。

さすがに五時間はつらい・・・。

肉体的にも精神的にも限界にちかった。

「おいつ」

横から低い男の声、横を向くと僕から少し離れたところに

七三分けの分厚い眼鏡をかけたいかにも真面目といった男が立っていた

僕とは、似ても似つかない父だ。

その後ろには、三十代後半前くらいの女性と僕より一こほど年下の女の子もいた

どうやらこの人たちが僕の新しい義母と義妹のようだ。

義妹は、気立てがよく成績もいい

僕とスキンシップがとりたいたのか、少しのことで話し掛けてきたり勉強を教えてくれとやって来る

僕も別にそういうのは、嫌いじゃないから普通に受け答える。

義母も明るく優しい人だ、よく僕や義妹に小学生みたいなイタズラをして楽しんでいる。

父というと、二人つきりになるたびに「早く出てけ」と暴言を吐いてくる

しかし、義妹は、可愛がっているみたいだ

でも僕は、いちいちそんな事を気にするほど純な子供じゃない。

父の言っていることは、しょせんただの雑音だ。

僕がこの家に来てから一ヶ月

父は、一応教師でい忙しいらしく仕事で帰ってこない

義妹もついさっき友達の家泊まりに行き

今夜家に居るのは、僕と義母だけになった。

深夜十一時頃「今、暇だね？」と義母が僕の部屋に入ってきてベッドの上に座る

宿題の真つ最中だった僕は、シャーペンから手を離し椅子に座りながら義母の方を向く

「何しに来たかわかる？」

「さあ？」

早く出てけ、という意味を込めて苦笑した

「さすがね、その冷静さ」

急に義母の顔つきが変わった。

さっきまでの『母親』の顔じゃなく、『独りの人間』の顔に……。

「今日は、君と取引にきた」

「取引？」

「実は、あの変態男が私の娘を狙っているのよ、毎晩あの子の寝顔や入浴中の写真を盗撮しては、ファイルしてるのよ？」

このままじゃ私の計画が最悪な形で成功してしまうわ、だからあなた手伝ってもらいたいの」

話の内容は、理解した。

どうやら変態男とは、僕の父のことみたいだ。

母との離婚の原因の一つは、父の少女趣味である

義母の言う『計画』とは、簡単に言えば自分の娘をだしにして多額の慰謝料請求だったらしい

が、ここままで父の少女趣味が酷いとは思わず、このまま行くといつ娘が襲われるかわからない

そこで、息子の僕をここに呼び寄せたらしい。

僕がこういう性格じゃなかったらどうするつもりだったんだろうか・
・・。

義母は、どこか抜けている。

暇つぶしにもなるし僕は、『それ』に乗ることにした

父との親子愛なんて生まれた時から存在しない。

第一話・僕（後書き）

短編か長編にするか悩みました

だから結構すぐに終わりそう・・・。

第二話：義妹

まずは、義妹を助けることから始めよう

同じ家に住み同じ学校に行くのだから簡単なことだ。

義妹が入浴中は、リビングにいる。

風呂場に行くには、必ずリビングを通らなければいけない

父が洗面所に行ったら後から僕も行けばいい

洗面所でやる動作なんていくらでもある。

義妹が寝ているときは、何時になろうとも父より早く寝ない早く起きる。

下校時は、仕事だから大丈夫として、登校時は、義妹より後に出て必ず8mほど間をあけて歩く。

これを毎日ずっと続けている、もちろん今も。

父は、だいぶイラダッている様子だ。

そろそろ、次の準備をしなくては、

「ただいま」

いつもどおり学校から帰って来たが、カギは開いていたのに家がありにも静かすぎる。

自分の部屋に鞆を投げて、リビングのドアを開けた

「何だ、居たのか」

義妹がソファーに身を沈め何かの ファイルを見ていた
でもよく見れば小刻みに震えている。

「どうした？」

僕は、義妹に近づく

「これ……ちゃんの……？」

「え？」

小声すぎてよく聞き取れない

「これ、お兄ちゃんが撮ったの……!!？」

持っていたファイルを大きく開いて僕の突き出す。

それは、父が撮ったと思われる義妹の盗撮写真集だった

多分、僕が常に義妹の後ろにいたり、入浴中いつもリビングにいたから

チャンスがあつたのは、僕しかないと思ったのだろう。

それにしても、よくまあこんなにたくさん撮ったものだ、

あきれるを通り越して尊敬にあたいするぞ・・・。

「だつたらどうする?」

僕は、義妹の問いにたいしイヤミな笑顔で返した

「!? 最低! 変態!」

義妹は、ファイルを僕に投げつけて涙目になりながら自分の部屋に逃げて行った。

「つーー・・・」

僕は投げつけられたファイルの角で顔を切ってしまった

血は、ほほから下に垂れ口の中に入る

「鉄の味・・・」

僕も父に負けなくらい変態だったみたいだ。

その日から義妹の態度が冷たくなり、口も聞かなくなった。

でも僕は、そんな事など気にもせず義妹の後を付回す

そのたびに義妹から無言の威嚇で敬遠される。

ある日父は、義妹を食事に誘った

学校の帰り道でたまたま父を発見し見張っていたがそういうことが始めは、断っていたが何につられたのか、父と一緒に歩き出してしまった

最初は、レストランで食事を楽しんだあとは、ショッピング。

どうやら母は、友達の家遊びにいったまま泊まることになったと説明し

僕にいたっては、知らないだと。

そろそろ八時、父に飲まされたのか義妹は、顔が真っ赤になりグデングデんだ

気が付けば二人は、ホテル街を歩いている。

酔った中二の女子が、まさか義父にホテル街に連れてこられているなんて思っているわけがない

そのまま「酔いを覚まそうか」と言いながら父は、義妹をラブホに連れ込んだ。

ラッキーなことにこのラブホには、友人がバイトをしており適当な理由を付けて中に入った。

「義父さんここどこ?」

「うん?楽しいところさ」

父は、義妹の腕をつかみベットを押し倒した

「え!?!」

さすがに酔っている場合ではない

「放して!?!」

義妹もできる限り抵抗し暴れたが父の方が強いのは、当たり前だ。

足の上に父が馬乗りし、手を押さえつけて義妹の自由を奪い

徐々にYシャツのボタンをはずしていく。

義妹は、目を涙で一杯にして身体を震わせている

「あの写真は、義父さんのだったのね・・・」

全てをあきらめたように言った

「あの写真・・・？」

「！あれを見たのか！？いつ見た！どこで見つけた！！」

困惑した父が義妹を攻め立てる

パシャッパシャッパシャッパシャッ

突然、大量のシャッター音とフラッシュが父と義妹に降りかかる

もちろんその音と光は、僕の手の中にあるインスタントカメラだ

「僕が見せてあげたんだよ・・・、写真」

バカにするように笑ってやった。

「何でお前がここに・・・！？」

父は、啞然として義妹から手を放し、たたずんでいる。

「早く逃げたらどうですか？警察は、もう呼びましたよ」

本気で驚いているようだ。

もう父の頭には、義娘にイタズラをするという本来の目的は、消え
うせているのだろう

自分の荷物をわしづかみにして、片手でベルトを直しながら大急ぎ
で逃げていった

なんて間抜けな格好だろうか、外をよく見れば警察が来てないのも
わかるのに。

本当にあの人は、僕の父親か・・・？

「・・・」

気が付けば義妹が僕を激視していた。

「何？」

「全て計算だったの？最初から最後まで・・・」

義妹は、そこまでバカじゃない。

それは、勉強だけじゃなく人間的にも言えることだ

「何のことかな？」

この世の全てをなめつきた用に苦笑した

「ただし、まだ終わって無いけどね」

義妹は、力ずよく「ありがとう」と呟いた。

第二話：義妹（後書き）

話は、出来てるのに打つのが遅すぎて
この話書くのに半日かかりました・・・。

『第三話：父』に続く

第三話：父

あれから一ヶ月、僕たちは、普段と変わらない生活をおくっている
しいて言うなら父が義妹も風呂場を覗かなくなったことくらいだ。

朝、世間は、K校事件の話でもちきりだった

もちろん僕の学校も例外では無い

各授業の教員たちもしきりにその話をする。

『K校殺人事件、私立K高等学校二年B組みの篠原温子（当時十六
歳）が

昨日深夜二時頃学校の屋上から飛び降りて死亡

第一発見者は、昨日の朝七時頃に毎朝朝一番で学校に来る清掃のお
ばちゃん

血だらけになった篠原温子を発見。

自殺か他殺かは、まだわかっていない』

その、K校がうちの中学と1kも離れていず、ここからK校に進学
した生徒も少なくない

しかも、僕の父は、その高校の教師をしていて

明後日の篠原温子の葬儀に出席するらしい。

僕は、僕以外の人間が死のうと知ったことではない

しかし、友人たちとの交友のため渋々その話に参加せざるえない

一日中同じ話を繰り返していると頭が痛くなる・・・。

翌日、篠原温子が他殺だと分かったのと同時に今度は

篠原温子と同じクラスの前田紗由（当時十七歳）が二年B組み前の廊下で

背中を刺身膨張で滅多刺しにされ死んでいるのが発見された。

第一発見者は、野球部のマネージャーで、殺害された二人とは、仲が良かったらしい

警察は、連続殺人として捜査中だ、と朝のニュースで言っている。

今、被害者の写真を見てきずいたが僕は、この人たちを知っている
何週間か前にうちの中学の卒業生だとかで僕にしつこく話し掛けてきた人たちだ

最近は、来なくなっただと思っただら死んでいたのか。

「まったく嫌になるようちの学校の子が次々と・・・」

「まだ凶器見つかってないんでしょ？危険ね」

朝食を食べながら父と義母が話していた、義妹は、まだ寝ているみたいだ

リビングの戸をかるく見て視線をTVに戻すと

気分が悪くなったのかチャンネルを回されてしまった。

「義妹を起こしてくる」

『あれ』は、そう言うリビングを出て行った

どうして、あんな冷たい子供に育たんだろうか。

『あれ』は、昔から私や元妻をバカにしたような顔で見てくる

私は、『あれ』が苦手だ。

手のかかる子供じゃなかったし、ほとんど放置状態で育てていたが、今じゃ何を考えているのかサッパリ分からない・・・。

そのてん新しい義娘は、氣立てもいいし頭もいいし顔もそこら辺の

中学生とは

比べ物にならないだ、あの事件以来私を避けるようになってしまったが……。

でもあれは、私が悪いんじゃない『あれ』悪いんだ……

いつも私をバカにしたように笑っている『あいつ』が!!

いつそ殺してしまおうかと何度思ったことが、でもいざとなると恐くなってしまふ自分がいる。

だが今日こそは、せつかく千載一遇のチャンスなのだから

私は、職場に向かう途中一通の白いシンプルな手紙を取り出した

「トウサン

イツシユカンゴ シンヤ イチジ

サネン Bグミ キヨウシツ キテ」

名前は書いてないがこんなことをするのは、『あれ』しかない

今日、私が『あれ』を殺しても連続殺人犯の仕業になって、私が捕まることは無いだろう

どうやって『あれ』がここに来るか知らないが

私を殺そうとするなら返り討ちにしてくれる。

思わずニヤけそうになる口を必死に抑えて学校の門をくぐった。

第三話：父（後書き）

次でもう最終話です

もともと短編にしようと思っていたものなので早いですね。

最終話：連続殺人犯

夜八時、職務が一通り終わると誰にも見られないように

人通りの少ない別館の図書室の教壇近くに隠れ

日直の教員が帰るのを待つ。

深夜十二時半、明日から登下校や深夜時は、警察や近所の人々が見回りに来る

今夜が本当に最後のチャンスだ。

誰もいなくなった学校内を歩き指定された教室に向かう

私立K高等学校は、県有数の進学校だ

基本的に真面目な生徒が多く、そこが売りだったのに……

そんなうちの生徒が殺害されるなんて、K校も終わりだな。

深夜一時十分前、教壇に寄り掛かり腕を組む

時間は刻一刻と過ぎて行き、深夜一時を回っても誰も現れない

もしかしてイタズラだったのか？ いや、そんなまさか……

だんだん私は、イラついてきて背後に隠しておいたサバイバルナイ

フを手を持ち

念入りに磨かれた刃に映る自分の顔を見る

やけに冷静だ落ち着いている。

コツ・・・ハア・・・コツ・・・ハアハア・・・

誰かの足音と、齒切れの悪い息使いが聞こえる

向こうは、私と違って興奮してい、るまるで獲物を狙う猛獣のよう
だ。

いや、私も同じかもしれない。

冷たい汗が背中を流れる、汗は冷たいのに体は、だんだん熱くなり
息も荒れてきた。

教室のドアに身を潜め『あれ』が来るのを待つ

その時私は、あることに気が付いた

今、この教室に向かって来てるのは本当に『あれ』なのか？

『あれ』は、人の心を持たない悪魔みたいなヤツだ私を殺すくらい
で興奮したりするのだろうか？

もしかして連続殺人犯なんじゃ・・・。

私は、急に恐ろしくなった。

コツ・・ハア・・コツ・・コツ・・コツコツコツ

いきなり歩く速度が上がった

今ならまだ間に合うんじゃないか・・・？

窓に向かって全力で走れば・・・

こっ殺されたくない！まだ死にたくない！

『あれ』を殺すまでは――・・・

私は走った

これ以上に無い速さで

斜めに大きくずれた眼鏡も直さず

毎日、念入りに整えている七三分けも乱れたままで

ただ『生きたい』と思いながら窓に向かって走ったのだ

でも、その思いが強すぎて重大な見落としをしてしまっていた

ここは、四階だったんだ……。

毎日来ている場所なのになぜ気が付かなかったのか……。

地面に叩き付けられて、私の右手左足は通常では曲がるはずの無い方向に曲がっていた。

右手に握られていたナイフは無残にも

左手項の上から地面に貼り付けられるようにザックリと突き刺さっていた。

遠のいていく意識の中、冷たい地面に張り付いた顔を上げ、自分の落ちたところを見る

かすかに誰かの影がある、ずいぶん小柄で女みたいだ

いや、あれは女だ……。

私をバカにしたように鋭い目つきで睨むあの少女は、まるで『あれ』

のようだった。

私の義娘・・・・・・・・・・

私は、死んだ・・・。

深夜一時十二分　僕は、今義妹と共にK校の二年B組み居る

僕がここに来たのは、ついさっきのことだが

どうやら僕のたのんだ仕事を無事終わらせたみたいだ。

「本当にバカだね、自分でかってに死んじゃった」

父の死体を見下ろしながらあきれたように言う

「・・・そろそろ帰ろう」

帰りにカタカナの手紙を処分するため『元父だった物』に立ち寄った。

「そういえば、何で父さんを殺す前に篠原温子や前田紗由を殺したんだ？」

父の服をあさりながら背後に立つ義妹に訊く

「だって目障りだったんだもん！お兄ちゃんの後付け回して」

少し不機嫌そうに言う

「・・・ふーん・・・」

僕は、手紙にライターで火をつけて、灰になっていく手紙を微笑した。

義母は、多額の保険料と父の財産を手にして大喜びだ。

しかし、自分の実の娘が僕みたいに歪んでしまったのにまだ気づいてないようだ。

最終話：連続殺人犯（後書き）

義妹の性格が若干変わったように見えますが（歪んだところ意外）
もともとこういう性格です。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1779b/>

殺

2010年11月6日01時26分発行